有形文化財（彫刻）

１９．木造阿弥陀如来坐像　１軀

■指定年月日　昭和 49 年 6 月 17 日（1974）

■所　在　地　飯田町 14-41甲

■像　　高　89.0cm

■所　有　者　大運寺

阿弥陀如来の阿弥陀は無量を意味する。寿命・慈悲、光明・智慧の量り知れないことをあらわし、無量寿如来・無量光如来と漢訳される。『無量寿経』によると、一王子が出家して法蔵菩薩となり、あらゆる衆生を迎え入れる最高の浄土を作るため、長い年月をかけて 48 の願にまとめ上げた。さらに兆歳永劫の修行を重ね、48 願を全て成就し、阿弥陀如来となり、建立した浄土である西方極楽浄土の教主となった。奈良・平安貴族にも広く信仰されていたが、末法到来と共に、その信仰は一挙に広がり、京都府宇治平等院・日野法界寺・鎌倉大仏に代表される定印阿弥陀像が各地に作られていく。像容は、教えを受ける人間の機根に応じ、上品上生から下品下生の９種の印を結ぶ姿であらわす。上生印を定印、中生印を説法印、下生印を来迎印といい、大指頭指を結ぶ上品上生印を特に定印ということが多い。

本像も、その流れを汲むもので、室町初期の作品とみなされている。右足を外に結跏趺坐し、右肩衣を抜ぐ偏袒右肩の像である。寛永９年（1632）から安永 10 年（1781）まで、北方村にあった浄土宗永福寺の本尊仏であったが、金沢泉野に引越ししたさい、同宗の大運寺に移されたと伝承する。